

古典の教養教育とアクティブ・ラーニング

塩田 公子

岐阜女子大学文化創造学部文化創造学科

(二〇一五年十一月二〇日受理)

Basic education and active learning for classical literatures

Faculty of Cultural Development, Department of cultural development

SHIODA Tomoko

(Received November 20, 2015)

要旨

不器用に、古典の専門教育に携わって四〇年、大学のカリキュラムや学生の変質（としか思えない自己の不器用さ、頭の固さ）にきづかないまま頑固に古典教育をしてきたが、思いがけず、昨年、名古屋大学高等教育センターから、『古典の教養教育とアクティブ・ラーニング』というテーマで話を依頼されたとき、改めて、過去四〇年間の古典教育を振り返ってみて、意識せずに、『教養教育』という概念と、その方法としての「アクティブ・ラーニング」を考えてきたことに気づかされた。その折に発表し、また簡単にまとめて、『高等教育センター』の報告書にも記したが、私の古典教育実践のベースになった、岐阜女子大学の紀要にも詳細に残して起きたいと考え、校を改めた。

1 はじめに

まがりなりに国文学科の教員でスタートを切った四〇年前の私には、「古典の教養教育」という言葉は、無縁に近かった。

今思えば四〇年前は、国文学（日本文学とはまだいわない頃）の全盛期だったように思う。特に、「国文学科」は専門を教える機関

であって、「教養」という言葉はそぐわなかったからである。

国公立大学から、私の奉職する私立の女子大にいたるまで、国文学は花形であった。大学一年生に変体仮名の読み方を指導して、古典作品の演習は写本の影印をテキストに使うことがなんの違和感もなく、困ったことも生じなかった時代であった。

それから、四〇年、大学をとりまく社会的環境も大きく変化し、

日本経済が破綻を見せはじめ、大学の内部も組織改革を迫られ、学問教育の内容も大きく変化、いや、本音をいうと変質してきたと明らかに感じるようになった。学生達の多くが、あたりまえのように、学業とバイトとを掛け持ちし、知的好奇心を持つ余裕もない日常に追いついて、教師は、めまぐるしい大学改革のなかにおいて、落ち着いて学問教育に専念できる時間が徐々に減っていった。「日本の古典を学び、今を生きるための指針にする」、そのような当たり前前の言説がそらぞらしく聞こえるほど、古典教育がないがしろにされて来たようにおもう。

高等学校の現場では、古典教育が十分に行われない現状もあり、一方多くの私大の入学試験の科目の中から、古典教科が対象外となる昨今、大学の教育現場の学生達は、そろって古典が苦手になっている。

今では、当たり前前に用いられている「アクティブ・ラーニング」というチームも、私のような年配者にはあまりなじみのないチームであり、いまでも、方法としてどのような講義の展開をもつてして「アクティブ・ラーニング」と名付けるのかはつきりとはわからないでいる現状である。だがしかし、あらためて考えるに、自分が『国文学(古典)』を学んだ時の方法が、どのように変化し、教える側に立つて以来、教えるための有効な方法を日々考えてきた。いやむしろ、そんな格好のよい言い方ではなく、日々同じことをしようとしたら、通用しないことに気づいて、慌てて、自転車操業的に、方法を考え出す日々の積み重ねといったほうが、当たっているそんな日々が大学の教育現場で数十年にわたり繰り返されたということだろう。ちなみに余談であるが、先日学生に「自転車操業」という単

語を聞いたところ、だれも知らなかった。

1

まずは、今までに私が教育現場で、関わってきた対象を考えてみたい。それは大きく次の三つに大別される。

- 1 専門学生(国文学科、日本文学科…:将来、国語の教師をめざす学生)
- 2 一般学生(教養教育の一環、教育学部部の幼・小教員希望者等)
- 3 社会人(文化センター、行政主導の読書サークル、講演会の聴衆等)

これらは、それぞれに古典教育における課題が異なる。

○ 対象1、2ともに、私が対象としてきた学生の多くは、高等学校、大学受験を通じて、古典文法を十分身に付けていない。あるいは、まったく高校の教育現場で古典教育をうけてこなかった学生が多かったという現状がある。たまに偏差値の非常に高いといわれる大学で、心で喝采を叫びたいほど古典に精通している学生たちとの講義を経験したが、それは、入試という制度のなかで、文法をある程度学んできた結果であろうと思われる。

○ 対象3については、年齢層により異なるが、大半は、古典文法を意識して読んでいくわけではないようである。雰囲気的に読んでいるらしいということが多い。

つまりは、対象1、2、3ともに共通する欠点を意識して、正し

く読むための最低の条件(文法)の再確認が重要だと考える。

特に大学の現場で、「文法重視」ということには異論もあると思う。ただ現在の若い世代の傾向として、文法を気にしなくても、作品を読む習慣を通して読解力が身につくことは、期待できないのが現状である。岐阜女子大学の例として、「近代文学作品研究」の講義で、樋口一葉の『たけくらべ』を取り上げた時に、学生にとって、明治初期はすでに古典の領域であるようで、そこで方針変更して、明治時代の短歌をとりあげたが、それも作品の読解、鑑賞はなるとか追いつくものの、作品の歴史的背景や、文学史の位置づけなどに及ぶと、説明等に大変時間がかかるのが現状である。

また、国文学を専門に卒業研究をさせる学科などでは、大学入学初年度に、あらためて「古典文法」を学ばせるカリキュラムを備えている大学もある。

筆者も、岐阜女子大学では、「日本語表現基礎Ⅱ」の講義で、「古典文法」を教えているが、高等学校までに十分に学んでいない現状が見て取れる。また、愛知淑徳大学では、『古典文法基礎』の講義が国文学科、メデイプロ学科ともにあり、まずは「文法」を学ぶことが第一歩であるという認識がみてとれる。

2

そのような現状を踏まえ、筆者は最近次のような点を、古典作品の講義で心がけている。

- 1 基礎文法力の完成をめざすこと(対象のそれぞれの目標・目的の相違を考慮しながら)

(1) 国語の教師をめざす専門学生……古典を教えることへの自覚と自信を持てることを目的とする。

(2) 一般学生……教養、自国の歴史、文化、他分野へのまなざしを持つためにも、正確に古典文を読解する必要がある。

(3) 社会人……より深い理解と、鑑賞にむけて。あるいは記憶を呼び起こすため。

2

自分の力で古典を読解し、感動することを目指す。現在、著名な古典文学作品は、おびただしい注釈書、現代語訳が存在する。それらは、古典作品の研究や、読み解くための指針となるはずが、受け入れる側(学生等)が無批判に鵜呑みにする現状も否定できず、独自の読解の力を養成できない。そのために、まず自分の力で、原典そのものを読むことができる力が必要である。

この2点をつねに前提として、それぞれの、対象、レベル(学年等)に対応するプログラムを考えている。これに関しては、末尾添付資料(見取り図)参照のこと。

3

2で述べた目的を実践するには、とりあげる教材の選択が重要となる。そこで、この目的のためによりよい文献を模索してきた。その結果、次のような理由から、三作品を選択した。

古典教育のために筆者が選択した教材は、(1)『竹取物語』、(2)

『小倉百人一首』、(3)『源氏物語』である。これらは共通して、専門教育から、古典教養教育まで幅広く利用できると考えるからである。その理由を次にあげると、

○ 個人の専門の時代に近いため、扱いやすい。(教員個人の実力の限界の問題として、他時代、他ジャンルは、教養教育の段階では扱えるものの、専門教育に至った場合、個人的に知識不足、学問的な研究不足のために、対応できなくなる場合がありうるからである)。

個人的には、「中世王朝物語」が専攻なので、教育現場でこれらの作品群をとりあげるとは、己の研究にも資してありがたいのであるが、実際の体験上、岐阜女子大学で、これらの作品を取り上げて演習、講義が可能であったのは、二〇年ほど前までである。「中世王朝物語」はこの一五年ほどで注目され現代語訳なども完備されつつあるものの、まだほとんど研究されていないので、前掲の「2 自分の力で古典を読解し、感動することを目指す」という目的の最も最適な文献と考えている。しかし、なんといいつつも、「はじめに」で述べた学生の古典文読解力の低下の現状では、注釈、現代語訳がないと扱いにくいという現状があるからである。

○ 「中世王朝物語」の作品群は、数年前からセンター試験等とありあげられたことで、比較的知られるようになったが、実際には、非常に難解で基礎教育には全く適さないと考えている。日常生活のさまざまな局面で親しさを覚える作品であること。いずれも国民的文学と理解してもよい、知名度の高さ、現在のメディア等での取り上げられている点からも、教材として最適

な作品である。

○ 映画、ドラマ、歌舞伎、落語、絵本、漫画等を利用して、幅広い授業展開ができる。

4

つぎにこれら三作品について、具体的に今まで行ってきたカリキュラムの例をしめす。ただし、名古屋大学高等教育センターのセミナーでのアクティブ・ラーニングの実践として、『竹取物語』は詳細にとりあげたので、その実態は後述する。まずは、他の二作品、『小倉百人一首』と『源氏物語』の実例についてあらましを述べておく。

一 『小倉百人一首』

以下、『小倉百人一首』をとりあげた、従来の講義のカリキュラム例を示す。講義の対象の違いとレベル、全体のプログラムの位置づけ、などの違いによって三通りの方法に分類した。

(1) 「作品全体としての枠取りを語る」必要のあるプログラムの展開。

たとえば、『文学史』『文学概論』などの講義中では、『小倉百人一首』のみで半期の時間をとれないため、以下のような概論的な説明とからめて講義をおこなう。

○ 和歌一般の文学的知識(歴史、勅撰集、歌合、歌論等)

○ 修辞法や具体的な例……実作へのリンク(創作系の卒業研究・本学の書道専攻の学生等、社会人等)

○作者の周辺、成立時代(藤原定家、冷泉家、源平動乱の時代等)

(2) 個別の作品(百首それぞれ)を詳しく学ぶ必要のあるプログラムの展開

たとえば、『古典文学作品研究』『古典講読』、また一般対象の文化センターの古典講座などの講義では、半期、あるいは通年をかけて、『小倉百人一首』をとりあげることができる。その時間的メリツトを利用して、プログラムを構築することができる。

以下、具体的な過去の実践方法の例を示す。

○和歌の背景の時代と詠者の問題、社会的な展開

『小倉百人一首』は、所収和歌の成立時代は奈良から鎌倉初期までの広範囲に渡るため、歴史的な観点を導入できる。

また、女子大では、女性の生き方、平安時代の女房生活へのまなざしを考え、現代と比較検討させた。

○所収の和歌の作者の、他の作品、歴史ドラマなどとのリンクを考え、他の古典作品や、歴史との関係で講義が広く展開できた。例として、『枕草子』と清少納言、『源氏物語』と紫式部、在原業平と『伊勢物語』、紀貫之と『土佐日記』、赤染衛門と『栄花物語』など、作者とその著作との関わりについて。

また、歴史的には、崇徳上皇と「保元の乱」、後鳥羽院、順徳院と『承久の変』などの歴史とのリンク。また、平兼盛、壬生忠岑と『天徳内裏歌合』から、文化史的な問題へも発展させることができた。

○成立後の、江戸時代までの享受の問題のなから、文化史的な問題として展開することが可能であった。

これは、昨今の大学の教育事情から、かつての国文学科のように、各ジャンルで専門の教員を擁することが出来なくなった場合、必ずしも専門の講義だけでなく、他の時代も古典の守備範囲として扱わねばならない場合に今後も有効であろう。

① 小野小町……『小倉百人一首』の作者が、伝説化していく姿を追う(七小町伝説、玉造小町など)

受講対象と、講義の目的のためにそれぞれの作品を素材として用いる工夫も可能である。

② 小野小町の食生活を知り、当時の食文化をとりあげること(『玉造小町盛衰書』)で、古典作品にすこしでも触れる事を目的とした。(家政学部の学生対象)

③ 歌仙絵の変遷等、デジタル・アーカイブ・映像処理等とからめながら、デジタル映像化する試みなどを模索させた。(文化創造学部の学生)

④ 在原業平と『伊勢物語』の関係から、「伊勢物語」のパロディ(『仁勢物語』など)への興味の広がりを持たせることも可能であった。

これらの試みは、古典文学を専門にしない対象学生に、すこしでも古典に興味を持ってもらうために、堅苦しい素材にしないための工夫として考えてきたものである。

(3) 専門の学生対象

まず、講義で『小倉百人一首』取り上げるときは、活字のテキスト

トではなく、必ず、変体仮名のテキスト（影印本）を使うことを心がける。

その理由として、

(1) 和歌は、三十一文字という文字数制限があることにより、変体仮名を読むのが、散文の長文を解釈するより楽である。そのため、他の専門の講義において、変体仮名を読むための練習の素材としても、『小倉百人一首』は有効な作品である。

変体仮名の和歌を、現代表記に直し、かつ校訂する過程を経ることで、和歌のみにかぎらず、散文作品に対象を広げ読み取る力を養い、また、作品を自分の考えで校訂するという、もつとも大切な読解の基礎を学ぶこともできると考える。

この後は、先に述べた、古典文学を専門にしない学生対象の1、2のカリキュラムを選択して導入することが可能である。

これ以後は、あくまでも、専門性が高度に完成された時の希望とどうか、夢のようなのだが、写本でのカルタ取り（江戸時代のカルタ等を用いて）を皆で楽しめるところまで教育現場で出来れば喜ばしい。専門のゼミならば可能かと考えるが、筆者は残念ながら、まだその機に恵まれてはいない。

『小倉百人一首』を教材として取り上げた結果として、この方法は、社会人にとくに有効だった。『小倉百人一首』の歌を解釈するだけでは、散漫になるため、和歌の作者それぞれの作品や、プロフィールからの講義展開は、講義の流れや、カリキュラムにメリハ

リをつけることができた。

また、大学の教育現場においては最近では資格、免許のための講義が増えることにより、専門の講義、『文学史』『文学概論』などの単位が減ったことにより、単体の作品をメインでとりあげることができなくなったため、半期の講義で広範囲の作品群に触れさせるためにはこれらの方法は有効であった。

二 『源氏物語』

長編という性格上、また、文章自体の難解さによって、全体を把握することは他の古典作品に比して、困難であるため、他の作品をとりあげる以上に、理解のための工夫が必要となると考える。

四〇年以上前ならいざしらず、冒頭で述べたような大学の古典教育の現状から考えると、『源氏物語』を半期の講義でとりあげることは、巻単位ならば、可能であるが、全体把握はほとんど不可能ではないかと考える。

一方、一般対象の文化センターの目玉作品であり、『源氏物語』でなければ受講生があつまらないといわれるほど、一般には人気の作品である。

筆者の経験からいうと、文化センターや、地域の読書サークル、行政主導の講演会などという「文化講座」における方法は、大きく二つにわけられるのではと考える。

1 まとめ読み

(受講生は)注釈書を片手に、現代語訳等に助けられながら、難解な箇所や、原文の背景にある文化、習慣の違い、心理の把握、等の読みを知る。

受講生が、作品全体を知っているという前提で、主題論、個別登場人物論、作品論等を、教授者が研究者としての問題意識で語る場合などもある。

2 基礎的な読解作業

必要な文法を適宜説明し、理解を深めながら、細かく読んでいく場合。

一歩進んで、写本（影印本）を教科書にして読み進む場合もありえる。

それでは、肝心の教育現場で、『源氏物語』を教えるにはどうしたらよいかということである。

先に述べたように、長編の作品の性格上、全体を教えることは無理であるので、短い期間（半期、通年）で『源氏物語』を教えるべく工夫が必要であり、日本で最も偉大な小説の一つといわれ、海外でも評価の高い作品のあらましかでも知ることが、大事なことがある。そして、学びの時期に、『源氏物語』を少しでも読んだことがある、あるいは、興味を持つことで面白い作品だという記憶があること、それが大切であろう。現在の圧倒的な源氏ブームを鑑みて、多少の変動はあれおそらく将来もこのブームや人気は、波のように繰り返されるのではないかと考える。将来の教養教育の一端として、まずは、『源氏物語』にふれたことがある記憶を大切に心に植え付けてもらいたいと思うのである。そのためには我々教授者はどのような工夫が大切であるという思いで、以下のような工夫を重ねてきた。

1 映像資料（映画、ドラマ、歌舞伎）等の利用

とくに歌舞伎利用の場合は『源氏物語』理解の方向のみでなく、伝統文芸の理解側からのアプローチにも用いることができるプログラムを考える。

2 漫画など、学生にとって身近なものでまずは全体を把握させる。

3 二千円札の「国宝源氏物語絵巻」の図柄を利用して、学生の身近な興味を引き出し、『源氏物語』の主題まで短時間で近づける工夫。

（これは、筆者が、過去一〇年以上にわたり、南知多ホテル「源氏香」での『源氏物語講義』月一回で実践してきた方法である。メンバーが毎回異なるほぼ初心者集団に、絵巻を用いて『源氏物語』のエッセンスを1時間で語るとともに、それに必要な他知識を付け加えて、短い時間で、必要な『源氏物語』の知識を教えることができるプログラムである。）

具体的なカリキュラムは、また、別の機会に譲るとしても、以上の方法を用いるにしろ、共通して必要なことは、

- (1) 導入に用いる素材、資料と、原作との距離をつねに指摘し、その差異を考えることで、『源氏物語』への興味を引き出すこと。
- (2) なぜ原作が変えられているのか、意図やその背景を考える。

この(1)、(2)の観点では、歴史、文化、政治、社会的に生ずる様々違いによる問題として考える視野をもつことも重要になってくる。一言で言うと、『源氏物語』を教えるいく時に必要なことは、対象が誰であれ、作品全貌の把握と面白いと思わせるきっかけを与えることかもしれない。

しかし、興味をもって、それがすぐに原作を読むことにたどりつくことは難しい。そこには、大きな言葉の壁があるからである。ここから先は、本音をいうとまだ『闇の中』である。

5

最後に、『竹取物語』を用いた、実際の講義プランを示したい。

1 素材に『竹取物語』を用いた理由

- 中学校の教科書ですでに学んでいる。
- 子供のころに、紙芝居、絵本、語り聞かせ等で、ほとんどが知っているはず。忘れている場合はいたし方がないが。
- 若い世代にとっては、バイブルといってもいい、ジブリ制作の『かぐや姫の物語』が二〇一四年公開され、現在では、教材として用いることが可能である。

2 教科書は、教員が独自に編集したプリントを配布。

毎時間、講義内容に合わせた作業プリントを配布、回収。すべてのプリント内容を示したいが、紙幅の関係で、割愛する。

3 講義の目的

記憶の中の「かぐや姫」を思い起こし、原作を学び、千年もの長きにわたり、日本人の心を捉えてきた意味を考え、伝えてきた人々の営みと想像力に思いをいたす。

4 講義プログラム

以下の項目を、講義の対象、時間数などにより調整して組み直して用いる。

(対象とする講義の種類は、大学現場『文学概論』の一部、読書サークル、高校の模擬授業、等)

- (1) 記憶の中の『かぐや姫』『竹取物語』を思い起こす。
- (2) なぜそのように記憶しているかを考えてみる。絵本、紙芝居等の記憶。
- (3) はたして原作はどのような話かを知る。『竹取物語』の文学史的知識(専門教育の領域にリンクする)。
- (4) 「竹取伝承」について正確に把握する。原典は、『竹取物語』と『今昔物語集卷三十一・竹取伝承』があることを知り、比較検討する。専門的知識と読解力を養う。
- (5) 『竹取物語』のメディア(映画)の鑑賞等、原作との比較検討。
- (6) 『竹取物語』を題材にした、新しい創造の営み(課題、レポート等を通じて)。
- (7) 専門へのいとぐち 変体仮名テキスト、対校等。
 - (1) (6) を学んだ上で、変体仮名テキストなどで原典を読んで、個人の読みを完成させる努力をする。

5 講義プログラムにそった講義実例

- (1) と (2) 記憶を次の記憶のポイントを設定して、思い起こさせ、その後、メディア(紙芝居、映画、絵本、アニメ等)の実例を提示して、原作との距離を考えさせることを目的とする。

記憶のポイント

- かぐや姫を手に入れるために、翁は、竹を切ったのか？切らないのか？（原作本文の解釈）
- 切ったとしたら、それに用いた道具は何か。
- かぐや姫が出す難題はいくつか、また求婚者の数は、何人か。（これは、専門への入り口。『竹取物語』『今昔物語竹取説話』の比較へ）
- 難題の品物の種類はなんであったか。
- 帝の求婚の有無……天皇制の問題・国定教科書の存在（昭和8年国定教科書「さくら読本」所収『かぐや姫』）
- 昇天の時に、おじいさんとおばあさんにかぐや姫は手をふったか。
- 昇天の時に「羽衣」を着るか、着ないか……（伝承の理解）
- 言葉（単語）の基本的理解の違い。例「きとかけ」になりぬ。」

- このような点に関して、現在、周囲に存在する『竹取物語』のメディアと、原作との間に違いが多くあることを問いかけて行くことにより、それぞれの記憶と向き合い、好奇心を引き出し、原作へと向かう意欲を持ってもらう。ここで理解してもらいたいポイントは、
- 1 原文を理解するためには、古典の知識と、文法力と、読むための努力と忍耐を必要とすること。
 - 2 なぜ原作とちがう改変、変貌がなされたかという好奇心を自分なりに持ち、それを考えていく力が必要であるということ。

現在のメディアと、原作の違いの一例を参考としてあげておく。

- 1 龍の首の五色の玉という難題について、ある幼児用絵本では、五色（こしき）ではなく、（ごしよく）と書いてある。（誤植?!）
- 2 つばめ子安貝という難題について、絵本では二枚貝をえがく。以上のように、子供のメディアにおいて、原作が故意に改変されることの意味などを考慮する意識を持たせることが大切であろう。

- (3) まず、導入として『国定教科書』を読む。一般教養の場合には、古典の世界への入り口として、歴史的仮名遣いの世界にふれるチャンスにもなる。また、学生の記憶の原典として、この教科書の内容、記述は大きな存在だと考える。つぎに、『今昔物語集所収・竹取説話』を、全文を読む。

難題の数が三つであること、竹を切るか否か、かぐや姫が昇天の折に手を振るか否か、帝が求婚するか否かの確認。

- (4) 『竹取物語』原典をよむ

半期、または通年単位で読むには長い作品なので、対象、講義の種類により、どのように読むか、また選択して読む場合は、どこを選択するかを考えてプログラムを組む必要がある。

いずれの場合にも、心がけるべきは『竹取物語』冒頭1ページは、写本で渡し、写本で読むルールを教えることだと考える。

その上で、『今昔物語集所収・竹取説話』との違いを明確に理解し、その違いのよって来た理由、また現在のメディアで扱われた場合の違い等を、考察する。

また、『竹取物語』の枠を構成する、古代伝承（『難題求婚』『羽衣伝承』『異境訪問』）についても、資料等で補足し、読み、考える。

次に、同じように、『難題求婚』『羽衣伝承』『異境訪問』などをテーマにした作品、物語、伝承について考えていく。

(5) 原作を十分理解した上で、映画等の鑑賞をし、新しい想像の世界のすばらしさを読み取り、感じていく。

筆者は、日本映画『竹取物語』とアメリカ映画『コクーン』、ジブリのアニメ『かぐや姫の物語』を取り上げる。

とくにアメリカ映画『コクーン』は、日本の古典『竹取物語』に着想を得ながら、リアルな現実、偏見の問題を取り上げた優れた作品であり、「古い」の問題を考えるためにもよい比較になる。別なプログラムで、「おぼすて伝承」(大和物語、今昔説話から『楢山節考』までをとりあげる)を講義する時には、連続して利用できるメディア素材である。また、「かげ」(『竹取物語』本文「きとかげになりぬ」)の古典的理解の問題解決の糸口としても有効に用いることができる。

(6) 『竹取物語』を使って、独自の創造をこころみる。

これは、レポートとして課し、自分の専門、興味にしたがい、新しい『竹取物語』の解釈を創造へと導く努力をする。

(実例) ○ 初等教育学科の学生は、紙芝居、絵本の作成。(採点後返却、現場での利用)

○ 観光文化学科の学生は、『異境訪問譚』を利用した、旅行計画の作成

この、『竹取物語』をベースとした創造の試みは、従来何度も実践してきたが、レポート作成に関しては、教授者が期待する以上に、

学生達は夢中になれるようである。ただし、全員が講義で学んだ原作のエッセンスをわかっているわけではないと思わせるような提出物が現れることもあるので、まだ基礎的な理解の部分で、講義内容、カリキュラムの不備があると感じる場合もある。

(7) 専門教育への移行、『竹取物語』を、写本で読む試み。

写本を読み、諸本校合をする(対象者の力により、諸本の数は調節。場合により、2本でもよいから、対校すると効果的である。)

その中で、本文の細かい違いを読み解く。違いの種類を想像する。誤写、言葉の違い、書写者の読み方の違い等、それらを想像して、考える力を養う。

自分で考え、よりよい、あるいはより理解しやすい本文を選択していく読解の力を養い、不明な語彙などをつねに辞書を利用して検索する力と習慣を身につける。

本学は書道コースがあり、書道専攻の学生は、おおむね写本の読みが早い。また、本学は複数専攻が同じ講義を受講する関係で、友人同士で教えあうという効果も期待できる。

なお、この写本で原典を読むという試みは、現在までは、大学における専門教育の場で行っているのみである。今年度、社会人に、『竹取物語』の写本を読む講義を実現できる見通しである。

現在までに行ってきた、『竹取物語』のプログラムの中で、受講者がどの程度、積極的に、アクティブに講義に参加できたかを知るために、適切なプリント課題を配布、講義中に考え記入して提出させる。しかし、その都度、結果について話し合うという段階にはな

かなか至れない現状である。

6

以上の3、4、5で述べた古典教材の講義を通して、つねに心がけてきたことは、

1 古典素材に興味を持たせて、読んで見たい、勉強してみたいと思わせるための工夫をすること。

2 好奇心を抱いたときに、古典の原典が、正確に読み解けて、理解ができるための、「古典文法の力」「古典語への理解」「現代と異なる古典の時代の社会習慣や常識に対する教養と理解」が必要と考える。教授者は、これらを総合的に講義、学習のなかで身に付けていけるプログラムを考えること。

以上の二点である。「古典嫌い」は、つまりは「食わず嫌い」であることが多いのである。その作品がいかに面白いかを身をもってわかってもらい、辞書、事典類の助けを借りても、自力で読むことの意欲を引き出し、楽しさを知らせることが先決である。

教授者とは、そのような手助けをする存在であるということである。

そのためにアクティブ・ラーニングという方法は有効であろう。

近年アクティブ・ラーニングについては様々な議論がなされている。最近はまだなじみない言葉であるが、今までの四十年の教育の現場はまだまだなじみない言葉であるが、今までの四十年の教育の現場で、一段高い教壇から聞いているだけの学生に一方的にレクチャー

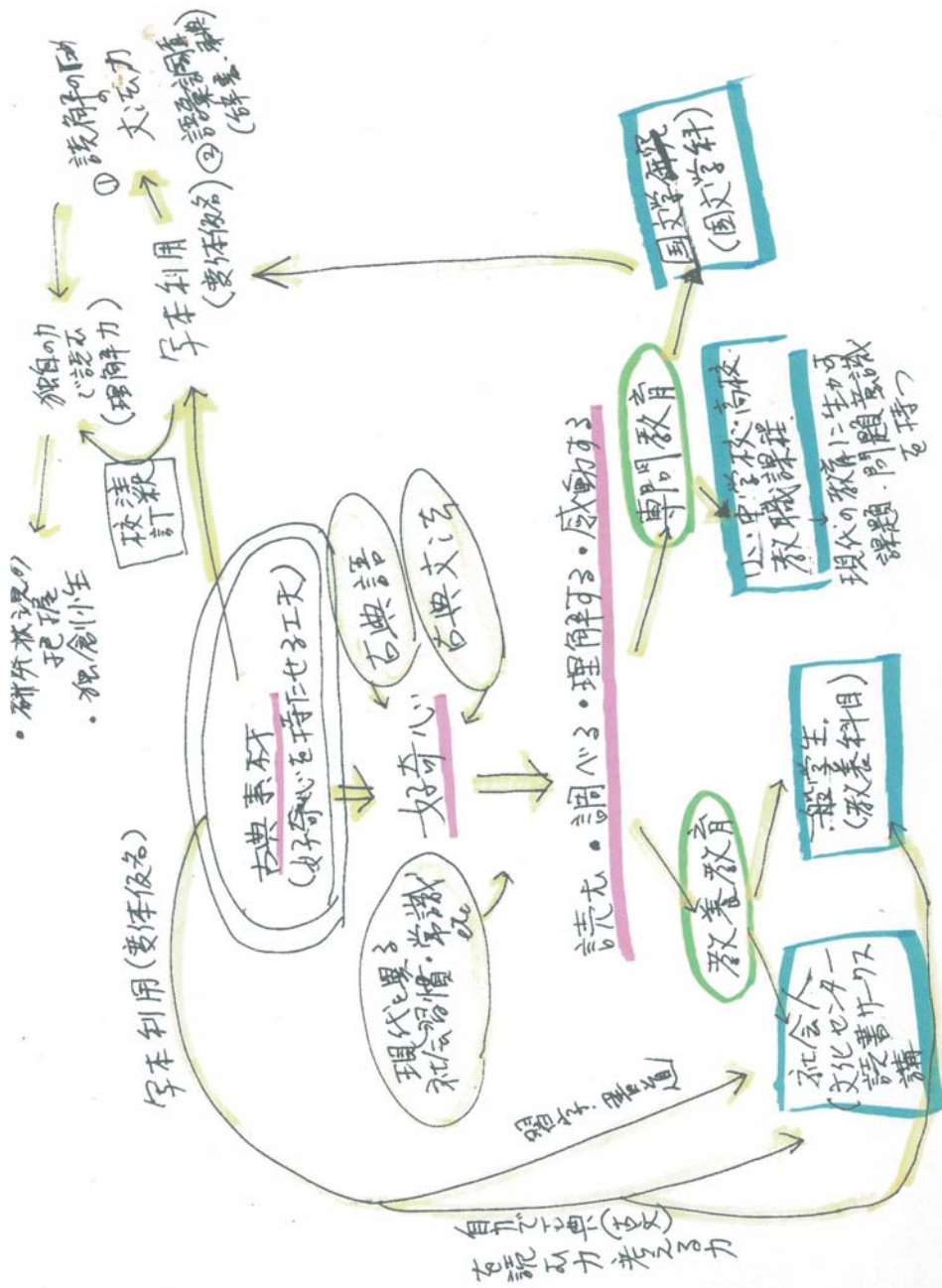
をするだけの講義時間がいかに不毛であるかを感じ始めた時から、すでに、彼ら、彼女らにどのように対象の作品に興味を抱かせ、意欲的に作品を理解し、考えていく時間を作るかを常に考え続けてきた。思えばそれこそが、私のアクティブ・ラーニングだったように思うのである。(はつきりいつてしまえば、今ごろ気づいて問題にするかもしれないと思っている。)

筆者は日々の教育の場の工夫の結果として、現在に至った講義方法として、一つは、興味を持たせるための工夫を最大限に考える事である。千年以上時を隔てていことを飛び越えさせるための工夫などの導入など少しでも親近感をもてる題材を利用して、原作への興味を引き出すことが第一歩である。

そして、その作品への興味を持たせることができた次には、先に述べたように、自分の力で読み解き、理解し、感動する道筋を確保することである。

そのために有効な方法の最たることは、極力、原作の写本(影印本)のテキストを用いて読む努力をして、古典文法の知識を駆使し、辞書を引き、作品世界を自分の言葉と感性で理解できるように、指導することだろうと考える。変体仮名を読み解くためには、古典文法の知識が必要である、また不明な言葉を調べ検索するその間に様々な思考を必要とするからである。

しかし、これは気が遠くなるような時間と忍耐を必要とする方法であるかもしれない。



添付資料 筆者の古典教育の見取り図